

## 第74回青森県水産振興審議会

司会：本日は御多用中のところ御出席いただきありがとうございます。本日の司会を務めさせていただきます水産振興課の清藤と申します。よろしくお願いいたします。会議に入ります前に、本日皆様のお手元にお配りしております資料等の御確認をお願いします。まずは、次第です。次に出席者名簿、席図、審議事項についての資料、これらに加えまして本日の参考資料として、2025年度版青森新時代「農林水産力」強化パッケージと未来に繋ぐ資源管理2025をお配りしております。資料の不足がありましたらお知らせください。それでは、ただいまから第74回青森県水産振興審議会を開催します。まず、本日の審議会における委員の出席状況についてお知らせします。本日は大宮千恵子委員、小笠原雅委員、杉澤友恵委員、立石政男委員、成田直人委員、三浦雅子委員が欠席となっており、委員総数18名のうち過半数の12名に御出席いただいておりますので、本審議会が成立していることを御報告いたします。なお、本日の席順につきましては、五十音順とさせていただきますので、御了承くださるようお願いいたします。それでは開会にあたりまして、宮下知事より御挨拶を申し上げます。

小谷副知事：皆さんこんにちは。副知事の小谷でございます。本日、宮下知事がこの会議に出席させていただくことができないままので、知事より挨拶を預かっております。私の方で代読をさせていただきたいと存じます。本日はお忙しい中、第74回青森県水産振興審議会に御出席を賜り、誠にありがとうございます。委員の皆様には、日頃から本県水産行政の推進はもとより、県政全般にわたり格別の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。昨年策定した青森新時代「農林水産力」強化パッケージは今年2年目を迎え、農林水産業が持続的に発展する社会の実現に向け取り組んでいるところです。今年度は所得を上げるための生産者の経営改善支援、産業を守るための企業等との連携、次の代を支えるための人財の確保、育成を重点項目として、44のプロジェクトに挑戦いたしております。昨年の水産振興審議会でもいただきました様々な御意見につきましては、今年度、いか釣り漁業の経営安定に向けたプロジェクトを新たに追加した他、ホタテガイ養殖作業の協働モデルの構築、第三者承継を含めた新規就業者の確保、定着支援プログラムの策定など、様々なプロジェクトに反映させて取組を進めております。本県水産業を取り巻く環

境は、海洋環境の変化に伴う主要魚種の漁獲量の低迷に加え、漁業就業者数の減少や燃油等の物価高騰、高温によるホタテガイのへい死やマダイによる食害など厳しい状況が続いております。県といたしましては、このような状況の中、多くの生産者や水産業関係者と対話を重ね、その声を生かしながら、生産者に寄り添った取組を進めてまいりたいと考えております。本日は、環境の変化に対応した本県水産業、漁村の振興に向けた取組について、御審議いただくことといたしております。委員の皆様には、それぞれの専門的なお立場や御経験から、忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます。開会の挨拶といたします。令和7年8月1日、青森県知事宮下宗一郎の代読でございます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

司会：はい、ありがとうございました。会議に先立ちまして、1名の方が青森県水産振興審議会委員に就任されましたのでご紹介いたします。お名前をお呼びしますので、一度御起立いただき、御着席ください。青森県機船底曳網漁業連合会から谷地充晴委員です。

谷地委員：谷地でございます。よろしくお願いたします。

司会：谷地様、どうぞよろしくお願いたします。ここで小谷副知事は次の公務がございますので退席させていただきます。

小谷副知事：それでは皆さんどうぞよろしくお願いたします。

司会：それでは本日の審議会の進め方について説明させていただきます。まず、審議事項として、環境の変化に対応した本県水産業・漁村の振興に向けた取組について、資料により県から説明させていただきます。その後、委員の皆様から順番に御意見、御提言を頂戴するという流れで進めさせていただきます。なお、会議終了は午後3時30分を予定しております。以後の進行につきましては、議長を務めていただきます堤議長にお願いたします。

堤議長：はい、それではしばらく議長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。委員の皆様それぞれのお立場から御意見を出していただいて、本日の審議会が実り多いものになるようにしてまいりたいと考えております。どうぞ皆様には、これからの審議に御協力いただきますようお願い申し上げます。それでは早速議事の方に、案件に移らせていただきます。審議事項、環境の変化に対応した本県水産業漁村の振興に向けた取組について、こちらの説明を県よりお願いたします。

石戸課長：はい。水産振興課の石戸です。私から座って御説明させていただきます。審議事項の資料を御覧ください。環境の変化に対応した本県水産業・漁村の振興に向けた取組についてです。次のページをお開きください。まず、県の水産業の現状です。(1)漁獲量と漁獲金額ですが、1990年代から減少傾向にあります。2024年は漁獲数量が11万7,701トン、漁獲金額が340億6,105万円となっております。御覧のグラフのように、ピーク時は1982年の1,210億9,100万円となっております。また漁獲数量については、ピークは84万1,151トンという状況になっており、かなり減少している状況でございます。次のページを御覧ください。(2)2024年の状況です。漁獲数量はイワシ類が全体の約4割を、ホタテガイが約3割ということで、上位5魚種で8割となっております。右の方に移ります。漁獲金額はホタテガイが全体の約3割、スルメイカが約2割ということで、上位5魚種で約6割という状況となっております。次のページを御覧ください。

次のページを御覧ください。環境の変化です。環境の変化は、(1)の長期的な変化と(2)の短期的な変化に分けております。まずは長期的な変化として、魚種別の漁獲数量についてです。御覧のようにスルメイカの減少が顕著であります。そしてアカイカ、サバ、スケトウタラ、サケ、コンブも減少しております。ホタテガイについてですが、ホタテガイは比較的安定はしていたものの、2023年以降は採苗不振や高水温の影響により減少している状況となっております。次のページをお開きください。漁業経営体数です。漁業経営体数は漁業センサスによる調査になりますが、経営体数は減少傾向にありまして2023年では2018年から16%減少しており、3,116経営体という状況となっております。次のページを御覧ください。次は漁業就業者数です。漁業就業者数も減少傾向にありまして、2023年は2018年と比べまして18%減少して6,855人となっております。そして高齢化が進行しておりまして、44%が65歳以上となっております。次のページを御覧ください。次は新規漁業就業者数です。新規就業者数は減少傾向にありまして、個人の経営体のうち後継者を有している方は、4分の1程度とこのような状況となっております。次のページをお開きください。次は海水温の上昇です。日本近海の海面水温は上昇傾向にありまして、本県周辺では、100年間に1.2℃から2℃上昇している状況となっております。このような中でサケの漁獲量の減少やホタテガイのへい死被害等の影響が出ております。一方本来はいなかったケンサキイカが来遊していることやマダイの漁獲量が増加傾向にあります。

次をお開きください。次は、短期的な変化でございます。まず、物価の高騰です。燃油や配合飼料、漁業資材の価格は高止まりの状態となっており、漁業者には大きな負担となっております。こういう中で、国では漁業経営セーフティネット構築事業を実施しております。次をお開きください。このような中ではありますが、養殖生産量の増加ということをお伝えします。ニジマス、養殖サーモンですが、こちらの生産量は増加しております。そして海面養殖の可能性を探るために、下のようなマガキ等6魚種については、試験を県内の5ヶ所で行っている状況となっております。次をお開きください。クロマグロの資源量と漁獲枠についてです。資源量は御覧のように回復している状況にあります。そういう中で基本的な措置を実施しております。次をお開きください。海業です。海業については、2023年からプログラム作りの手引きを策定しております。そして佐井村、五所川原市では漁業体験のモニターツアーを実施、また昨年ですが、あおもりの漁師祭も10月にやっております。今年もやる予定です。そしてまた、25年はむつ市で漁業体験、加工体験ツアー等を試験的に実施する予定となっております。次のページが環境の変化に対するまとめを簡単に記載しております。

次、14ページです。この海洋環境の変化に対応するための取組として、まず1番として国の施策ということで、以下の5点、1番として、資源調査・評価の充実・高度化、2番として漁法や漁獲対象魚種の複合化転換、3番として養殖業との兼業化・転換、そして4番として魚種の変更・拡大に対応し得る加工・流通、5番目として魚種・漁法の複合化の取組等を行う経営体の確保・育成と、それを支える人材・漁協ということで、5つの取組を行っております。

次をお開きください。次は県の取組ということで、先ほど知事からお話もありましたように、青森新時代「農林水産力」強化パッケージということで、水産では5つのパッケージを盛り込んでおります。次をお開きください。各プロジェクトによる対応状況を説明させていただきます。まず1番目のホタテガイの300億円産業の恒久化として、水色の部分ですが、高水温に対応した新たなホタテガイ養殖技術の開発を行っています。そしてサーモンの一大産地化として、不振の漁業種類からの転換先の一つとして、サーモン養殖に取り組む新たなプレーヤーの掘り起こしを行っています。

次のページをお開きください。つくり育てる漁業の推進としては、近年の高水温の影響を特に受けているサケの回帰率向上に向けた種苗生産及び放流手法

の検討を行っております。いか釣り漁業の経営安定に関しましては、新たな漁獲対象の魚種としての南方系のイカであるケンサキイカ等の漁獲状況の把握に努めることとしております。そして小型いか釣り漁業の複合化の支援を考えております。次のページをお開きください。環境変化に適応した漁場生産の強化として、水産資源の回復、CO<sub>2</sub>の吸収・固定にも貢献する藻場の保全・創造の取組を行っているところです。説明は以上となります。

堤議長：はい。ありがとうございました。ただいま県より、青森県の水産業の現状と、水産業を取り巻く環境の変化、そして環境の変化に対応するための取組ということで御説明をいただきました。委員の皆様には、本県水産業漁村の振興について、県が取り組んでいくべき今後の方向性を中心にそれぞれの置かれている状況やお立場から御発言、御意見、御提言ということで頂戴したいと思っております。こちらから順に御指名させていただきますので、そうしますと、伊藤委員から参りましょうか？

伊藤委員：女性組織協議会の伊藤です。今日は、本日はよろしくお願いたします。私、ここ数年前から漁の方が、私ども新深浦町漁協なんですけども、漁の方が低迷してしまっていて、その中でもサケは去年昨年から全然取れなくなり、カレイやイカなどほとんど採れないようになってしまっています。今日来ている山下委員さんも新深浦町漁協の理事さんでありますけど、そうですよね。私達、浜のかつちゃにしてみれば生活をしていく段階で、旦那と息子のためには何が出来るのだろうか私達女性部員の人たち、会議をしまして、私達かつちゃですから、つくり育てる漁業に対してはほぼ遠い話でして、私達は何ができるのかな、旦那と息子を支えるためには何が出来るのかなと日々模索している状態なんですけども、今の段階では何を私達女性部ができるのかなという、感じで話し合っている状態なんですけども何かいい案件がありましたらよろしくお願いたします。

堤議長：ありがとうございました。それでは今村委員お願いたします。

今村委員：はい。柴田学園大学の今村です。本学では学生たち、若い男性たちがたくさんおりますので、何が出来るかっていうのを考えたときに、やはり食経験は大事かなと思っていて、お魚を食べた経験があって、それが美味しかったという記憶があれば、絶対どこかで生きていく中でまた食べたいって思う、場面が絶対生まれるだろうなって思っているんで講義の中に入れていものが何個かあるんですけど、例えば絶対1人、触れるようにイワシの手開きを

して、エスカベージュを作るとかがあったりとか、それから、今までであればやはりスルメイカ、ホタテはあの、某番組の影響とかだと、もう青森県民は全員捌けて下ろせるはずっていうのがあって、これは他県から来た大学生もできなきゃいけないなと思って入れていたんですが、ホタテは業者さんと最後まで交渉したんですけど、どうやっても無理で、今年はまだ献立から外さざるを得なかった。それからスルメイカに関しては本来は身の厚いところで、松かさ切りとかして中華料理に使う残った足のところで、イカメンチを作ってるんですが、これまた高く小さい小さいスルメイカを逆に1人1匹っていう形で、今年は手に入ったので、それでも全部イカメンチにせざるを得なかったみたいなのがあって、食経験を作っていける場面が減ってきてるのかなと思っています。それでもやはり獲れるお魚が変わってきたりとか、学生たちの嗜好も変わってきてますので、何らかの形でやっぱり食べて美味しさを繋いでいく経験をして、青森県の文化、食文化を繋いでいければいいなと思っています。その現場の皆様、大変なことたくさんあるかと思いますが、美味しいって言って喜んでる若者たちたくさんおりますので、ぜひぜひまた青森県を盛り上げるために、水産業が盛んになっていければいいなと思っています。

堤議長：ありがとうございました。それでは続いて、なぎさ委員の方からお願いいたします。

なぎさ委員：はい、食育料理家、なぎさなおこです。飲食店のサポートや飲食店の経営などをしております。このデータを見ていって、本当に青森県の漁獲量がすごく少なくなってきてるんだなっていうのはわかったんですけども、全国的に減ってきてると思うんですけども、全国のデータと青森のデータとどちらも見ることで全国的にどれくらい下がっていったら、青森だけが極端に下がっているのかどうかとかがわかると思うので青森県のデータと合わせて全国的にどんな感じなのかなという全国のデータも体験できるというふうに思いました。どうしても私の場合は料理教室だったり飲食店として仕入れのサポートなどをさせていただくことがあるんですけども、その卸価格だったり店頭価格がどれくらい変化しているのかっていうデータもですね、消費者としては知りたいところかなと思いますので、その、イカであったりしたら、何年前はいくらだったけど、今だと平均価格がどれくらいかというような消費者目線の価格のデータなどがあるとすごく嬉しいなというふうに思いました。ありがとうございます。

堤議長：ありがとうございました。はい。続いて成田委員の方からお願いいたします。

成田委員：漁業共済組合の成田といいます。県の皆様には常日頃、漁業共済事業、それから漁業収入安定対策事業に対する御協力誠にありがとうございます。この度のテーマでございますけども、我々漁業共済団体は今まさにこの環境変化に伴う不漁、不作を必死に支えているところでございます。今まで獲れていたものが獲れない、今までうまく育っていったものが育たないといった状況で、漁業者が今大変苦しんでいるところでございます。そういった中で本県の漁業者の水揚金額の低迷によって本組合がお支払いした漁業共済金等は、近年増加傾向にあります。昨年度は漁業共済金と積立ぶらすの払い戻しを合わせますと約63億円、本県の業者にお支払いしているという状況でございます。またですね、近年でいうとコロナ禍があったんですけど、この中の魚価の低迷というのがあったのですけれども、令和に入ってから6年間で急激に支払いが増えておりまして、直近6年間の累計では329億円という額、大きな支払いとなっているというところでございます。まさにこの環境変化に対応した漁業への取組というのが、急がれていると思うのですけども、先日ですね、岩手県の人間とちょっと話をしたのですけれども、イセエビが取れているという話です。それから、ワカメ養殖の芽が、温暖地域にいるアイゴの食害にあっているという状況だという話です。そういう話を聞くと、もうすぐ本県でもイセエビが漁獲されたり、アイゴの食害によって海藻類が食べられちゃって磯焼けという話題も出てくるのかなというのを考えると、加速度をつけて環境が変化しているというのを感じているところです。そういった中で、この環境変化に応じた本県の水産業、漁村の振興に向けた取組に対する意見ということでありますので、大きく4つちょっと私から意見したいと思います。まず1つ目が、環境変化に対応するための国の方針の中で資料にもありましたけれども、国の方針の中で、海洋環境変化に対応した魚種転換や、複合経営の導入というのがあります。漁業共済団体もこの方針に合わせてですね、来年の4月に制度の改正を行う予定でいるんですけども、ただ私水産庁の方にも言ったんですけど、聞こえは大変いいんですけども、近年不漁が続いていて、後継者もいないというデータもあります。そういう中で、青森県の中小企業者が、果たしてこの新たな投資を行って、魚種転換とか、複合経営を導入できる力を持った人が、果たして何人いるのかなっていうのがあります。方向性は間違っていないと思うんですけども、県を始めとする行政では指導、サポート支援を十

分行っていただきたいのがまず1点。それから2点目はサーモン的一大産地化っていうのがあって、私もこれ大賛成であります。ただ、全国どこでもサーモンサーモンと、そこかしこもサーモンです。そういった中でサーモンだけじゃなくて、何か青森でしかない高付加価値魚種の開発、ブランド化そういうのをぜひ取り組んでいただきたいなというのがあってですね、青森県の漁業者が誇りを持って育てられるような、ホタテ以外で青森といたらこれというふうなものを開発してブランド化してほしいというのが2点目です。それから3点目は、稚魚の放流とか魚礁、藻場、そういった調整を将来の漁場環境を見据えた対策として行って整備してほしいというのが3点目。それから4点目が、資料にもありましたけども、漁業者がものすごい勢いで減っています。うちの契約もものすごい勢いで減っているのですが、将来的に漁業者がいなくなると元も子もないので、また若手の漁業者、それから女性の漁業者の育成支援、それから移住就業支援、そういったのを行ったらどうかというふうに思ってます。特に女性の漁業者っていうのは、歴史的な背景とか、それから一子相伝的な組合員制度とか、地域の掟、微妙なものが壁になって、今実際うちの契約は本当に女性がメインになって沖に出てるような契約者っていうのはないです。様々な壁があると思うんですけども、漁業者が増えないことには、漁村の振興というのにも繋がらないと思いますので、ぜひ是非ですね、漁業の魅力をどんどん発信していただいて、そういった若手、女性、漁業者増えればなというふうに思ってます。5年後、10年後、本県漁業の状況がものすごい勢いで変わってると思うので、環境変化を見据えた取組をどんどん行ってほしいというふうに思います。以上です。

堤議長：ありがとうございました。それでは、二木委員、はい、お願いいたします。

二木委員：はい。県漁連から総体的に今の環境の変化に対応した本県水産業漁村の振興に向かった取組について、現状とその取組を少しお話ししたいなと思っております。本県は主として個人漁業とホタテ養殖業の二本柱で構成されておりますが、現状については外的要因としては近年の温暖化を含めた環境変化により本県の主力であったスルメイカや秋サケの漁獲不振が挙げられ、内的要因としては漁業者の高齢化や新規加入がみられない。先ほどの成田さんと重複しますが、漁業者の減少により生産力の低下等がみられるということで、これまで安定生産とされたホタテ漁業については、3年連続の減産に加え、再生に向けて努力していますが、自然の猛威には太刀打ちできないほど危

険な、危機的な状況になっております。またマグロの資源量は確実に回復しているものの、国際的に決められた漁獲枠を遵守することで、せっかく網に入った魚までも放流しなければならないことや、マグロが増えたことで、本来獲れるべきイカがマグロの餌になっているという状況でもある。このような状況は、漁協の頼みである販売事業の低下に繋がり、漁協規模の縮小につながっているということです。これまで漁協は漁村地域の中核的機能を担ってきましたが、このままでは役割を果たせないというところから、漁村地域の活性化も損なわれている懸念も生じます。取組については、漁村、漁協の組織基盤強化のため、漁協の組織再生や合併が急務となっている。その上、青森新時代「農林水産力」強化パッケージの取組についても、漁業所得向上に繋がるよう、やらなくてはならないなどは思っております。そのためにはあらゆる事業に対応できる柔軟な組織体制が、整備が必要であるということと、漁業が安定した魅力ある職業であることから、本県水産業の活性化に繋がるものと確信している。本県漁業組織を再生するよう、県からの合併に対する協力をお願いしたいなと思っております。以上です。

堤議長：ありがとうございます。それでは、野田委員よりお願いいたします。

野田委員：はい。八戸から加工連の名前で来てますけど、仲買連の方も私がやっております、それ合わせて話をしなきゃいけないなと思っはいるんですけども、うちの社員からはあんた話長すぎるって言われてるんで、5分間で収めたいなと思っておりますけども、今日言いたいことは大きく2つ、八戸で水産アカデミーという団体があって、水産においての問題点について、水産業者もしくは仲買業者だけではなくていろんな学校の関係であるとか、組合の関係であるとかいろんな人が集まって、それぞれで意見を出し合うという話になっています。その中で大きく今2つありまして1つは水揚げの方法でいくつか問題点が出てきてます。大きな順番で言うと、旋網の船が入ったときに、旋網のグループの方が20グループだとか、あとは時々7グループだとかっていう形で集まってきますけど1回に水揚げしていいのは13グループと八戸の方では、岸壁の数があるんで、決めてはいるんですけども今度はそこで1つの船から決めた値段っていうので、3人の仲買が買いますって言ったときに、8名では岸壁から仲買さんが持ってきたトラックで水揚げをして、その次に3人いたら高い順番に1番目の人たちが持って行って、2番目の人たちが持って行って3番目の人たちが持っていくという形になっているんですけども、1番目の高値を出した人が、トラック今少なくなってますよね？2台しか

用意できませんでした。でも6台分買いました。そうすると2台が持って行って、八戸のどっかで降ろして戻ってきてっていうのを3回やったところで2番目の人が水揚げをしなきゃいけない。いや、これ、真面目にやっていますからね。阿呆だと思ったらいけませんよ。これが正しいやり方なんですけども。それをやるせいで、旋網の人たちは値段が決まったら1時間か2時間で終わるだろうっていうのがそれで済まない。トラックが少ないせいです。そのために最初はバーっとやるのに、2番目の人たちの値段を決めて、その人たちの水揚げが終わるのがひどいときは2時とか3時、新鮮なものを獲ってきてそれはねえべっていう話なんです。なんでそれになっているかっていうことを水産アカデミーの中で考えていかないかっていうことになっていて、それについての答えではないですけども、案みたいなのをいくつか出していきます。山下さんいるところで言うのもなんですけども、いか釣りの遠くでイカを獲ってきてサイズごとにきちんと船の中で分けて、きちんと凍結して、八戸に持ってきたやつを今度水揚げするってなったときに水揚げの担当の人が、人間が用意できないっていうことで、1日に2隻までしか水揚げができません。阿呆っぽく聞こえるでしょうけれども、それが人手不足の今の八戸の状況です。何月何日に何人用意しなきゃっていうのは大体わかる時はわかるんですけども、それでも人の用意ができないっていうことになると、そういういか釣り船がたくさん来てもずっと待ってなきゃいけないって。悪い話をしてはいけないと思ってるんですけども、そういったのに対してどうしていくと、もっとたくさん水揚げをささっとできるようになるのかっていう話もあります。あとはトロールも水揚げしたときに魚種とサイズ選別等して、こういった形で売るのが最高のネタになるのかっていうところがあるんですけども、実はそれは歴史的な話をすると、八戸魚市場がそれをしなきゃいけないっていう部分がまだ残っていて、昔の歴史でそれをすることになってるんですけども、トロールの人には申し訳ないけれども、プラス何パーセントか、もしくは何円か払うともっと高く売れるようになる。それを、魚市場に頼むんじゃなくて、仲買の方が用意するか誰かが用意するかはあるけれども、どっかのそういう専門の業者にお願いすると、もっといい値段がつくかもしれないっていうけれども、今は八戸魚市場がそれをやらなきゃいけない。もう5分経ったからこの辺でやめます。という話がやらなきゃいけないっていうのが1つ目で、2つ目の話は八戸に大きな市場というか水揚げ場所っていうのは鮫と館鼻と小中野、3ヶ所あります。それぞれあの目的とやり方があっていいん

ですけれども今のように昔のようにたくさんいろんなものが獲れることは少なくなってきました。それを従来の市場で上げるのではなくて、いろんなところで上げられるようにしておかないと、いわゆるマルチな使い方ができるようにしておかないと、みんなのためにならないと私は思っています。ただ、マルチに使うっていう話になったときに、HACCP 管理ができる形の市場というか、水揚げ場所っていうのは実は少ないんですね。凍ったものをあげる専門のところであるとか、あとは新鮮なものを、いわゆる生魚を揚げる所と、大きく必要なものが変わってきます。それらをどこでもできるような形にして、その季節だとか、あの入ってきた船に合わせて良い、みんなにとって良い形での水揚げできるようにしたいなと私は思っていますんで、それが水産アカデミーの中である程度決まっていたときには県の方にもお願いしたいなと思っております。7分掛ってしまいました。失礼いたします。

堤議長：はい。ありがとうございます。それでは八戸委員、お願いいたします。

八戸委員：漁青連の八戸です。平内町でホタテ養殖をしています。例えば2年前の高水温と、去年の餌不足でも稚貝のへい死、半成貝も成貝も稚貝もへい死したんですけど、去年の餌不足では成貝はここ何年かで見ると一番生存率がいかなと思って、ちょっといい材料もあったんですけど、なんか今年もすごい暑くてすごい水温上がってて、また、また稚貝死んじゃうかなみたいな、なんか空気も漂い始めていて、最近何とか持ちこたえられるかもしれないですけど、この状態はちょっと若い漁業者さんがもう入ってくる雰囲気じゃないんで、漁業から離れていく人もいるかもしれないし、この状況の中で少しでも期待してる材料みたいなのを探してみたんですけど、去年、今年って言って、いろんなものに海に入ってる養殖資材にホヤの付着が結構見えていて、他の県の宮城とか岩手の業者さんに、ちょっとその画像を見てもらったんですけど、天然で何もしないでこれだけ付くのはなかなかないよって言われて、ホタテに変わるぐらいの収入になるっていうのはちょっと考えにくいんですけど、あの今ホタテ 100%で行ってる漁業から私達も本気で他の魚種をちゃんと探さないといけないなって思ってます。ホヤ、年数掛かるんですけど、ある程度作っちゃえば手間かかんないんで、割と転換っていうか、もう1魚種増やすにはやりやすい魚種だなって漁業者としては思ってます。あと本来、ムラサキイガイの付着とかマダイの食害とかも、これ多分ホヤでもあると思うんですけど、いろいろ難しいところあるんだと思うんですけど、今年、宮城、岩手の人たちと少し研修会、漁青連でやろうかなっていうのも予定してます。あと色々ワ

カメの話も聞いてみたんですけども、陸奥湾冬の水温が低すぎて、結構ギリギリだよってというのは言われてるんですけど、高水温、なってくるんだったらワカメもありなのかなって少し思ってます。あと別な話で今、浜で割と問題になっているのが、ホタテの数量少ないんですけど、養殖残渣は、うん過去一ぐらい多いんですね。その処理の費用も掛かると思うんですけど、費用の前に、なかなかいい匂いしちゃうんで、なんか今埋めようかとか、色々進めるみたいな話もあるし、どちらも量獲れなかったら飲食とか別なことも少しやりながらとか、考えられるんですけども、残渣が何かもう、ちょっと問題で、漁業以前の問題かなと。その処理をこれからちゃんとしていければなと思ってました。

堤議長：はい。それでは、平田委員の方からお願いいたします。

平田委員：鱈ヶ沢の平田です。先ほどですね、話になっております海洋、環境の変化に伴って従来の魚種の漁獲量が減る一方で、南方系の魚種が確認されているということで、また資料にあった通り県内でも、ケンサキカあるいはマダイが増えているってお話ありましたけども、鱈ヶ沢町においてもですね、やはりケンサキカとサワラが目立つようになってきてます。たまに突然マダイの大群が大量に揚がることもあります。今日、魚種っていうのは変わりつつあるっていうのは、現場の方でも当然認識はしているでしょうけども。私、北海道にいたとき、北海道ブリの話聞いてですね。なんかどんどんどんどんブリが揚がりだしたと。ただ、北海道市場がブリに対してして、あまり反応が良くないっていうか。ブリを食べる習慣がないっていうかですね。そういうことがあって、その後市場の方でもようやくブリっていうのを認識し始めて、東京の方に出したらですね、当時の獲れてない頃のが13位かな。一気に取り扱える市場で1位になったという話を聞きました。漁獲量も20倍になったということで、ある意味それはブランド化、北海道のブリということでブランド化されてきているというのを聞きました。まだまだ北海道では食べる習慣があまりないということで、生食だけじゃなくて、加工にもしてるという、そういう話を聞きました。同じようにですね、山形県で先ほどもお話しましたサワラが獲れているということで、ちょっと調べてみたら、庄内おぼこサワラということで、これもブランド化しているという話も聞きました。こうしたですね他県の状況を見て、今後県内でもですね、さっき整備のお話もありましたけども、これまで多く獲れなかった魚がブランド化っていう可能性がないわけではないというふうに思っております。今魚何あるって聞くとですね、アジっていうふうに言われまして、アジがなんか獲れてるみたいで。アジに失礼ですけども、

それなりに揚がっているアジを鱈ヶ沢のアジで売るかって言ってもなかなか誰もやってくれませんけども、そういったこともですね、可能性がないわけではないというふうに思うんです。県の方でも様々な調査っていうのはしているっていうのは伺っておりますが、改めて漁家所得の向上に繋がるというふうに思われます。もうちょっとやっぱり資源調査あるいは漁獲する場合の漁法とかまだ変わってくると思いますんで、そういったことについてですね、ぜひご検討いただきたいと。イカの方はケンサキイカの方は先ほど、説明がありましたのでそれ以外の魚種についても、ぜひそういったことをご検討いただければと思います。以上です。

堤議長：ありがとうございます。それでは続いて福岡委員よりお願いいたします。

福岡委員：はい。青森中央水産の福岡といいます。普段、水産物卸売市場で水産物卸売業務をやっております。本日の環境の変化に対応した県の水産業の振興策ということで、卸売業務を行っている者として、日々感じていることを少しお話ししたいと思います。先ほども県の方から説明ありましたが、気候の部分であったり、海洋環境の変化であったり、漁業資源の減少であったり、漁業者の高齢化、不足こういった複合的な課題に対して、持続的な、持続可能な発展を目指すという部分では非常に前向きな姿勢が感じられると思います。また資料にありますように、1990年代に比べて、今では数量で13%、金額で30%にまで落ち込んでおり非常に長く、数字だけ見れば壊滅的な資源量の減少という枯渇が顕著であるというのは我々も感じておりますし、数値も物語っているかと思えます。また気候は環境変化もそうですけれども、漁業者の漁業収入や働く環境などをいろいろな皆様のお話ありましたが、様々な要因が複合的に交錯した結果、漁業に対する魅力という部分が、全般的に薄れているのも一因ではないかと考えています。こういったいろんな問題ありますけれども、青森県では農林水産力の強化パッケージっていうものがあるので、様々な提言をまとめて推進しようとしていることは承知の上でその点では前向きな取組と認識しています。書いている内容としては、ホタテ産業の恒久化であったり、サーモンやナマコなどのつくり育てる漁業の推進の他、持続可能な漁業環境変化に対応した漁場生産力の強化など、多角的な面から推進する動きとして非常に有効的ではないかと考えます。そういったいろんな前向きな取組がある中で、我々市場として感じているのは、漁業者の皆さんの収入が安定して魅力ある職業として、安心して漁業に従事されるところといった

部分も大事ではないかと考えています。その上で、安心して従事されることで、県の魚介類を提供していただく。という部分が非常に大事な一因かと思えます。はっきりと我々市場の卸で水産物来て、それを買い付け等委託でありますけども、こういった部分を扱っておりますけども、生産者が売りたい値段と、消費者が買いたい値段も非常に乖離があると見ております。ぶっちゃけ生産者が高く売りたい、消費者は安く買いたい、この調整を市場として行っておるわけなんですけども、非常に難しい問題となっております。そういった部分は根本的なその収入を、県民所得の向上という部分まで繋がるかと思うんですけども、それも含めたこの強化パッケージが結果として、その推進に貢献することが一番でしょうけども、さらにその魚という、各生産者が上げてるブランドという部分、こういった部分が、価格競争から価値の競争というふうに変換していくということが必要なんではないかと考えます。また、我々もその流通、それから販売チャンネルの拡充、販売先の選択肢が増えるというこういった対応が生み出す水産資源の価値創造を進めることで、いろんな部分の全ての解決にはならなくても、日常になればと考えています。最後に県の水産業、漁村を発展させるために、様々な視点でいろんなアプローチが効果的であろうことから、この県の地理的、資源的な強みを生かしつつこの時代の変化というふうに対応するアプローチを持続的に行っていくことを、こういったことを念頭に我々も関わっていければなどと考えております。以上です。

堤議長：ありがとうございました。それでは、続きまして谷地委員よりお願いしたいと思います。

谷地委員：はい。八戸機船漁業協同組合の谷地でございます。今日はよろしくお願いいいたします。本日、環境の変化に対応した本県水産業漁村の振興に向けた取組についてということで、八戸から来ましたので八戸の現状を踏まえて、回答させていただきます。報道等でも皆さんご存知の通り、八戸魚市場が7期連続赤字ということで、八戸の水産業界が危機的状況にあるのは皆さんご存知かと思えます。一昔前は800億、水揚げがあったのが110数億、120億弱と、大きく減少、これに尽きるかと思えます。確かに環境の変化によっていろんなものが獲れなくなった。だから卸売業も大変だ。そしてそれに伴って、残念なことに地元の水産加工屋さんも今年に入って3件倒産と他の方も大変ということでございます。私、個人的な意見ですが、環境の変化によって魚が獲れなくなった。だから水揚金額が減った。だから水産業、各地域、大変だとこれは、これが一番の根本的な原因だと思います。しかしながら、私が思うのはですね、

獲る人が減っている。資源がないというよりも、獲る船が減っている。獲る船員が減っている。これが私は一番の水揚げが減っている要因じゃないかなと私は思っております。私達、青森、八戸機船漁業協同組合の中でも、中型いか釣り船があるわけですが、一昔前、平成元年では109隻ございました。今現在15隻。八戸のいか釣り船、小型、中級等の小型、残念ながら今年で0隻、全部なくなりました。小型のいか釣り船が何でなくなったか、孫の代まで財産を貯めたからやめたのでしょうか？私は違うと思います。やっていけないからやめたと思うんです。これですから、資源がない前に獲る人がいなくなったら、水揚金額が減る、水産業が成り立たない。私はそう思っているわけがございます。そういう中で、スルメイカ、アカイカ含めたイカの水揚げ量、八戸は52年間、半世紀に渡り日本一でございます。こういう明るい話題もあるわけです。そういう中でですね、私達、八戸機船漁業協同組合の中で、青森県八戸中型いか釣り船プロジェクトが立ち上がりまして、中型いか釣り船の、日本で初めて、業界初めてということで画期的な今の環境に合った新造船、これから水産庁の認定を受けて、今、新造船が造られているところであります。今回のプロジェクトにいか釣り漁業の経営安定化、新規で取り入れられたということは、我々の八戸いか釣り漁業の者としては、大変嬉しく思っているところでございます。中型いか釣り船199トン、まあ、八戸もですね、小型の型、イカ沖合遠洋ということがあるわけですが、八戸の水揚金額の9割は沖合遠洋の漁業者によるものであります。平成20年、中型いか釣り船3億8000万円で建造できました。震災後、被災をしました。じゃあ船を作りましょう。平成26年は6億2000万円でした。今プロジェクトで作っている船は12億円。コロナが終わりました。今、毎年船体（価格）が1億ずつ上がっている。これはいか釣りだけじゃない。トロールもそうですし、旋網もそうですし、とにかく船体が1年ごとに1億円、これはもう常識的に上がっていく。魚が獲れないから商売をやめるんですか？じゃない。やはり後継者もいる。乗組員もいる。ただ、船が古い。新造が作れない。ということで、廃業せざるを得ないという人がいるということが現状でございます。あとまた、これはまたちょっと話は変わるんですが、そういう中でも人手不足。先日7月12日に水産高校と漁師.jpと一緒にタイアップして、何とか水産高校に入ってくれる生徒さんを増やしましょうということで、小学校、中学生そして高校生、他県の水産高校の方もたくさん参加していただき、250名で盛大にあって、私の船もいか釣り船、中型いか釣り船、サンマ船、旋網船、そして県の青森丸、水産高校のこの4隻見

せて、とても活気があってですね、八戸市長さんもこれは毎年やっていきたいと。やはり水産高校も生徒がいない。なかなか入ってくれる方がいない。なぜか残念なことに水産高校があっても、なぜか水産業には入ってくれない。違うところに就職する。内航船に行く。他で仕事をするということが現状であります。ただ、そういう中でも前向きにいろいろ私達も漁業者も努力をしなければならぬと私は常日頃思っています。いないいない、魚がいない、人がいないじゃなくて、今年10月には（海の）底にはイカがいる。底曳き網にトロールは獲れる。こうなったら釣りイカさん、我々中型いか釣りは全然取れないというのが今現状です。獲れない、獲れないって言ってたってしょうがないということで、私も水産庁の水産政策審議会の委員をさせていただいて、そこで発言したのが、アカイカは到底、集魚灯では底にいるからと灯りが届かないから集魚灯っていうのを下げて、海底に、そして集魚灯を引っ張ってきてイカがワッとやって浮いてきたのを獲る。これがアカイカの獲り方。だったら八戸での漁にだって集魚灯使ったらいいんじゃないのと。これは日本海域では昭和に決まった法律で、集魚灯を使ってはならぬという、令和の時代に昭和30年の法律が未だに生きているというところで、今年10月の7日から11月の6日まで、中型いか釣り船、こちらを使って、試験的に実証をする予定ですので、県の皆さんには漁業調整等いろいろあることかと思えますけれども、よろしくお願ひしたいと思っております。やはり、獲れない人が、じゃなくてやはり我々漁業者がいろいろ水産庁なり、県の方のお力を得て、チャレンジしていかなければならないと私は思っております。以上でございます。

堤議長：はい、ありがとうございます。それでは、山下委員お願いいたします。

山下委員：私、青森県漁業士会の山下です。一番最初の伊藤さんの漁協のほうも同じくやってます。深浦町です。私は日本海側においてですね、マグロの一本釣りをやっています。昨日も、一昨日でしたか。100キロの1本と、80キロ1本で、値段がすごく、びっくりするほど高いというか。皆さん私達漁業者が漁協の方に売ってる単価ってあんまり知らないでしょう。スーパーの単価しかわからないでしょう。100キロのマグロ、1,000円切ってるんですよ。キロ単価。すごい値段でしょ？こんなもんです。確かにほら今は脂がのってないっていうところが確かにありますけども高いときで1,400、1,500円、そのような値段で、推移しています。環境の変化にもよりますが。やはり今、先ほど皆さん話の中であった通りやはりケンサキイカとか南方系の魚が本当に増えています。そしてまたサケとヤリイカ、ほとんどサケはもうほとんど皆無に近いぐら

い。獲れません。ヤリイカの方も確かに上がってはいるんですが、数量的には昔から見ると、半分から3分の1かな。そのぐらいまで落ち込んでいます。北海道の奥の松前とか、そういったところの方ではやはり正月ごろからもうすごくヤリイカが揚がっていると、もうこれはなんかの影響で海水温の上昇なのか、ちょっと私も学者じゃありませんのでわかりませんが、やっぱり北限がだんだんずれていっているのかなと思っています。そしてやっぱり、私達漁業者もそれなりに、努力をしていますが、やはり追いつかないです。今の段階でちょっと早すぎて。ヒラメとかは、放流の方で負担金とかやって、ヒラメはほとんど同じぐらいのキロ数が揚がっていると思います。やっぱり、これから漁業者、私達経営していくとなればやはり環境の変化、魚の変化に対応できるようにやはり漁業者も結構努力しています。だけれども、やはり漁業資材のこととか燃油代のこととかで、なかなか厳しい。どこの漁協もそうだと思います。右肩下がりの漁業者がいっぱいあると思います。その中でやっぱりほら、経営していくとなればやはり経費面で、やっぱりもう少しこうサポートが、支援が欲しいというか、そしてまた水産庁とか、なんかその場で、漁業士会の全国大会というところに参加したときのことでですね。いろいろと水産庁の方から、国の方から支援金と助成金とかいろいろな制度の資金あるんですよ。ただですね、その支援の制度の資金を使うにあたりですね。私達は零細企業っていうか、自営業者なので、従業員とか何とかですとちょっと雇えるほど余裕がありません。大きいね、会社とかはまだ別の方は、八戸（市）さんみたいに大きい、なんだっけ、トロールとか、基本的に大きい業者とか事務の人がいて制度資金を使うってね、その専門に、職員の、従業員の方を張り付けてできると思いますが、私達はそのようなことができないんですよ。結局お金を、制度資金を借りたり、支援してもらったりする過程での事務手続きがすごく何かややこしいですよ。ちょっと理解できないんだけど、使いたいけどもなかなか使えない、そういうような現状があります。支援金とかそういう制度資金、もう少し簡素化と言えればいいか、何か手続きの方、楽にできるようになればと思って、使うことができると思っています。そしてまた経営の方にも、充てることができると思います。ただ私達がやっているのは、漁協の職員がその手続きをしてもらって話し合ったけども、漁協の方でもちょっとこの状態なので職員を増やすと言ってもなかなか人件費の方が大変なようで、どうしても本当に厳しい状況にあるので、その辺もう少しなんていうんですか、柔軟に対応できればまたこれからも若い人がだんだん増えていくと思います。そしてやっぱり、あ

の谷地さんですか？私たち日本海側ですが、ほとんど後継者、10代の若い人って、ここで数えるしかないですよ。10年後、15年後、どうなってしまうのかなと思ったりしてね、今から危惧しているところです。ただ私も伊藤さんと一緒に中学校ですか、その人たちを、学生の人たちですね。それで今、その、漁業のことちょっと理解してもらおうと、出前授業とか何とかもやっています。そういうのをやっているのももう少し今の若い人たち学生とかそういう人たちに漁業のことを理解してもらって、漁業はいいもんだなと思ってもらえるような環境作りをしてもらえれば、私達もできれば、できる限りの協力はいたしますので、そのような事業を進めてもらえればなと思っています。以上です。

堤議長：はい、ありがとうございます。最後私も少し話しを。私も八戸学院大学の立場として教育とか地域への観点から少しお話をさせていただきたいと思えます。本当に、今、委員の皆様方おっしゃったように本当に水産業は特に、通常のエネルギー価格とか物価とか、物価高騰賃上げ、人件費の高騰とか、一般的な産業全般が抱えてる課題の他にやっぱり特有のですね、海洋環境であったり資源の問題であったり、本当にそういったものも抱えてて、本当に厳しい状況だというふうに思ってます。なので、本当にこれまで通りの延長線上で、ずっと仕事をしてると良いかというところと全くそうではなくて、今日のテーマも環境に対応するっていうところは非常にもう水産業も、いつもですね、この強化パッケージの方ですね、強化パッケージの方にちゃんと年度ごとにまた新たな政策を盛り込んでいってますけれども、それ以上にですね、本当に私達の意識もともに本当に更新、アップデートしていかないと追いつけない。置いてかれるというような気持ちでありますので、非常にですね、この強化パッケージに盛り込まれていることを全部どれも大事で、どれもきちんとどれを一番にとかっていうことでなくて、どれも並行してしっかりやってもらって、あの成果をしっかり出していただきたいというふうに期待はしているんですが、私達の意識ももちろんアップデートしつつ、やっぱり私が一番気になってるのは、今皆様もおっしゃったような後継者ということで、担い手不足といったところがやっぱり一番私にとっては気になっております。成田委員がおっしゃった女性の漁業ですね、促進っていったのも、私もすごく賛成で、ちょっと先日も天草の女性漁業者のところにもちょっとね、行ってきたりとかしてですね。やはり今まで海の神様が女性だとかいろんな信仰の関係もあったり、今までの習慣的なことで、漁業は、女性は船に乗ってはいけないというところもありますし、もちろん夫婦船で一緒に出るところもこの青森県内でも何人

もおられるんですけども、なんかそれももちろん、それも気にしつつ、やっぱり皆さんが水産高校の件もそうですね。八戸学院大学では水産高校生徒を育てようということを応援したいということですね。いろいろ水産高校の漁業実習の成果を発表してもらったり、あとカキの養殖ですとかいろんなことを、本当に様々な水産高校さんがやってるので、水産高校の生徒さんはもう最近はちょっと違うジャンルのところに就職する生徒さんが多いということもあって、なるべくせっかく貴重な体験勉強ということで、学びを得た学生はできれば、願わくば、その関係に行ってほしいということもあって様々な研究発表とか学びの場の発表を応援しております。恐らくこれからですね今までの、今、第一線で活躍しておられる方々の勘や長年の経験みたいなどころですね。それプラス、今の若者たちにはさらにデジタル世代ですので、データをちゃんと読める。何か様々水産庁でもいろんなデータ出てますので、やっぱりこれからの次世代の若者にはまたデータも、プラス読めてというところで、今までの、今の頑張っておられる世代の方と、次世代の人たち若者は、若者の漁業者とか関係者の人と何か共通ですね、学び合ってる場はあるんと思うんですが、何か一緒にですね、共有できるような場を設けるとどうかなというふうに思っています。なんか、技術の体験とか技術の共有ももちろんなんですけど、これからの事を話し合うだけでも全然また違うんではないかなというふうに、お互い気づきがあるのではないかなというふうに思っています。なので、漁業の技術とか設備の開発とか、いろんなスマート漁業とかも推進されてますけども、そういった大きいところのお話ももちろんなんだけれども、体験、食育のともそうですね、食文化のともそうなんですけどそういったどちらも、一緒にですね、しっかりと地域で支えてやっていけるような場というか、青森県がそうであってほしいなというふうに非常に思っています。去年ちょうど水産振興課さんのプログラムで、本学の学生がですね、20名ちょっとでしたかね、漁協さんから人が来ていただいて、サケを捌いて、はい、魚食の体験ということをやらせていただいたんですが、あの本当にどうなのかなと思って、男子学生がほとんど全員だったんですけども、魚嫌いの魚食べられないので僕やりませんって言った学生もですね、最後もうモリモリ、試食ではですね、もう食べてましたね。本当かと。本当に冗談のような本当の話なんですけど、本当に食べてて実際初めて、初めて魚を触った人ほとんどほぼ全員初めてウロコを見た。あと包丁もね。包丁握った学生も初めて多かったですね。普段やっぱり料理をしないというかねスポーツ学生が多かったのですね。あれ

なんです。いずれにしてもですね、非常にその後継者、担い手不足というのは深刻で、もちろんこれは水産業に限ったことではなくてですね、あの先日ちょうど青森県全体の産業の話なんですけど、去年6年度だけで、先ほども倒産3件といったお話もありましたけれども、青森県内は500件ぐらい、廃業を560件ぐらいかな、廃業をしています。その内、もう正規雇用が800人ぐらい、その560件の廃業、廃業ですよ。倒産も含め、廃業で失われてて。でも、赤字で大変で廃業したっていうのは半分弱、半分は実は黒字経営だけど、跡継ぎがいなくて、ちゃんと商売が成り立ってるのに閉めている。というのが現実あってですね、その失われたその全部の売上総額150億ぐらいだそうです。いろんな様々な作業が集まっての累計なんですけれども、本当に非常に青森県の経済にとって本当にもったいないなと思って、やっぱりこの後継者不足担い手っていうのは本当にもう真剣にですね、日々取り組んでいかなければいけないというふうに、はい、思っております。なので水産業もですね、いろいろお互い若い人もそう、あの現役でバリバリ活躍されてる方も皆さんですね。意見やアイデアを出し合っただけであえるような場を作ってですね、引き続き丁寧かつ迅速に進めていろんなプロジェクトも立ち上げていただければいいなというふうに期待しております。はいすいません長くなりましたが以上でございます。その他の皆様何か言い忘れたこととかちょっともしあれば時間の方はまだよろしいでしょうか？よろしいですか。何かございますか？はい。

野田委員：はい。実は2年前まで水産庁の政策審議委員になってまして、そのときに同級というか、ある大学の助教授だか教授の女性がいるんですけども、この間、私んところに来て、四国のある水産高校がもう生徒が集まらないのでやめることにしましたと。ただし水産高校をやめるだけだとどうしても問題は残るんで、普通高校の中に水産科というものを作って、そっちの方に集約するという感じになって、今度はその水産科の方で育てた子供たちのためにいわゆる年に一度修学旅行じゃないけれども、あの経験として、どっかに行って漁業をもしくはそのそれを獲った魚の扱いというものを、経験させたいっていう話になって、野田さんいるんだったら八戸に連れて行きたいんだけどいい？っていう話になったんですよ。いや、俺がイエスもノーも言いづらい。けどもうそういうふうになってるのっていう話で。今言いたいのは、全国で水産高校はたくさんあるはずなのに、その水産高校自身がなくなってきているんだそうでっていうのが第1点目。第2点目はそこで水産高校なくなった上で普通高校の中に水産科が出てきたときにその子供たちが経験する場所と見て

いったときにその大学教授からすると、東北だとか、三陸だとか八戸っていうのはすごくいい場所だっているんで、それを県の方としても全国からそういった子供たちを集める場所として何かうまく話しできないかなと今思っています。ありがとうございました。

堤議長：はい、ありがとうございます。

谷地委員：今、水産高校の話が出たので、やはり私達漁業者はとにかく八戸地元  
に立派な八戸水産高校があって、就業フェアとかいろいろうちの船乗ってち  
ょうだいねっていう各社ブースを作ったりなんかしてやっているわけですが  
けれども、やはり先ほども申し上げたように、もう本当に数人しか、1人2人っ  
て言った方がいいのかな、にしか漁業には興味がない。あとはみんな内航だっ  
たり、他のスーパーばかり、全然関係ない専門学校にまた行ってる人だとか、  
いろいろそういう話を聞いたというのが現状でございます。私考えたんです  
ね。こないだも東北6県で水産高校の先生と教頭先生と我々漁業者とお話し  
たらやはりみんなも水産高校はなくなる。各県もう入る人がいないというよ  
うなお話も多々ある。そういう中で、どこの先生と言うのが水産高校に入っ  
ても、やはり漁業につかないと、やはりこれは我々漁業者にも責任があると、や  
はりこの間もやったんですけど小さいときから小学校のときから漁業、何か  
結び付けて、将来漁師になりたいなというような教育をしていかなければな  
らないのかなとで、我々がそれをお手伝いはできるわけですよ。漁船を見せ  
たり、こんな魚をとってきてるんだよとか、先ほどお話あったように、魚を食  
べさせるとか、そういうのはこれから我々漁業者も中心にやっていきたいと  
は思っておりました。と同時に、私は考え方を改めてですね、水産高校はもち  
ろん種類が増えたり就職活動行くんですが、地元ですね、普通高校にもです  
ね、漁業、うちの船に乗りませんかっていう就職活動したらと私考えたんです。  
普通高校も人は必ず皆サラリーマンになるのかなって考えたんです。中には  
漁師になりたい人いないのかなって考えて、普通高校に私行ったらやはり担  
当の先生は、え？何しに来たの？みたいなことを言われたんですけどもや  
はりヒットはするんですね。中にはいるんです普通高校でも、なんだうちの船  
に乗りたいのって聞いたら、おじいちゃんが乗ってた。かっこ良かった。だか  
ら水産高校だけじゃなくて、普通高校にもですね、やはり私達漁業者がアピー  
ルをすれば、やはり漁業に興味のある子は絶対いるということがここ数年で  
わかったところでございます。以上でございます。期待いたします。

堤議長：はい、ありがとうございます。はい。それでははい。よろしいようであれば、これで議事の方は全て終わりましたので終了といたします。あと本日十分に御発言できなかつた方については後ほどお電話等で御意見いただければということでございます。委員の皆様方には円滑な議事進行に御協力いただき誠にありがとうございます。また県には本日の審議会の意見を今後の政策に反映させていただくようお願いいたします。それでは司会を振興会、司会を県の方にお返しいたします。

司会：堤議長ありがとうございます。それでは閉会にあたりまして、種市局長から御挨拶申し上げます。

種市局長：種市と申します。皆様、長い時間にわたりましてお疲れ様でした。一言挨拶の方させていただきます。本日はご多忙中にも関わらず出席いただき、また、多岐にわたってたくさんの御提言、御意見いただきまして誠にありがとうございます。委員の皆様方からもお話ありました通り、地球温暖化に伴う海洋環境変化の影響によりましてですね、いか釣り、定置網を始めとする漁船漁業、それからホタテガイの養殖業もですね非常に厳しい状況になっておりまして、これは漁業者の経営のみならず、関連産業への影響も本当に大きくなっているものというふうに十分認識しております。この高温等に関しましてはですね報道にもありましたけれども、青森市の7月の最高気温の平均値が31.9℃ということですね、これ平年値ですとですね、26℃だそうです。なので、今年の夏だけで6度、6度気温が7月に上がってしまってるということですね、この上昇幅というのは、全国で一番だというふうに聞きました。本当に危機的な状況だし、私も危機感を持っております。さらにはですね、人口減少がやはり急激に進んでおりまして、今から50年前、青森県の人口といえば150万人と、いうことだったんですが、今は115万人まで減っておりまして、50年後にはですね、半減すると、つまり60万人ぐらいの規模になってしまうというような予測までされております。県としましては、水産業における所得向上であるとか、人材育成、労働力の確保といった重要政策に加えましてですね、高水温対策から、燃油高騰対策といった近々の課題について積極的に取組を進めているところではあります。なかなか地球温暖化、人口減少といった急激な変化への対応というのは、本当に苦慮しているというのが正直なところであります。しかしながら、立ち止まっているというわけにもいきませんので、皆様方としっかり連携してですね、県民、国民の命を支える食料の安全保障になっているという共通認識のもとにできる対策、取組、こういったものをです

ね、地道に、そして着実に前に進めていくということがまずは重要だというふうに考えておりますので皆様の御理解と御協力をよろしくお願いしたいと思  
います。本日いただきました提言、意見につきましては、これはやはり課題解  
決のきっかけになっていくというふうに考えておりますので、県の施策の検  
討の方を進めていきたいと思っておりますし、必要によっては国の方にもし  
っかり要望していきます。本日に限らず、今後も皆様の方の御意見等は聞いて  
いきたいと思っておりますので、その際にはどうぞよろしくお願いいたします。本日  
はどうもありがとうございました。

司会：これを持ちまして、第74回青森県水産振興審議会を終了します。委員の  
皆様、大変ありがとうございました。